皇居（江戸城）散策ガイド・ブック

江戸の地に最初に根拠地を置いた武家は、桓武平氏の江戸重継であります。平安時代末期から鎌倉時代初期かけての江戸氏の居館が、現在の東御苑本丸・二の丸辺りの台地上に置かれていたとされています。15世紀の関東の争乱で江戸氏が没落したのち、扇谷上杉氏の上杉持朝の家臣である太田道灌が、享徳の乱に際して1457年（長禄元年）江戸城を築城しました。徳川幕府の公文書である『徳川実記』ではこれが江戸城の始めとされています。道灌が上杉定正に殺害された後、江戸城は上杉氏の所有するところとなりました。1524年（大永4年）扇谷上杉氏を破った後北条氏の北条氏綱の支配下に入り、後北条氏の本拠地であります、小田原城の支城の1つとなります。1590年（天正18年）豊臣秀吉による小田原攻め（小田原征伐）の際に開城。秀吉によって後北条氏旧領の関八州を与えられた徳川家康が、同年8月駿府（静岡）から江戸に入りました。
1600年（慶長5年）関ヶ原の戦いで勝利を得て、天下人となった家康は天下普請により、主に外様大名を使い、川の治水・入江の埋立・城下町の整備・江戸城の建設を行わせました。1636年（寛永13年）徳川幕府の権力を示す日本最大の規模を誇り、威厳あふれる江戸城の全容が完成しました。
主流の学説での江戸時代の期間は、1603年（慶長8年）家康が征夷大将軍に任命され江戸幕府を樹立してから、1868年10月23日（慶応4年／明治元年9月8日）の「一世一元の詔」の発布、移行に伴い、慶応から明治に改元されるまでの265年間を指します。
1868年（明治元年）に江戸城から東京城へ、1869年（明治2年）には皇城へ、改称。1888年（明治21年）に明治宮殿の完成により宮城へ、1948年（昭和23年）に現在の名称であります、皇居へ改称されています。
皇居は、現在宮内庁が管理する、宮殿や宮内庁庁舎が有る旧西ノ丸地区、天皇皇后両陛下の住居になります、御所や宮中三殿などがある吹上御苑、皇居警察本部や宮内庁病院、天守閣跡などがある皇居東御苑があります。皇居外苑は環境省が管理します、皇居前広場や内堀沿いの遊歩道や緑地部、北の丸公園があります。皇居の広さは、宮内庁管理部分で115万㎡で、東京ドーム25個分であり、濠と皇居外苑も含めた総面積は、約230万㎡で東京ドーム50個分の広さになります。

江戸城（皇居）案内距離、時間、目安表

	ガイドポイント	移動距離	積算距離	停留時間	移動時間	積算時間	標高
①	桜田門（外桜田門）	0km	0km	10分	0分	10分	7.1m
②	皇居正門（西の丸大手門）	0.5km	0.5km	10分	10分	30分	5.4m
③	坂下門	0.4km	0.9km	5分	8分	43分	5.3m
④	桔梗門（内桜田門）	0.3km	1.2km	5分	6分	54分	3.9m
⑤	桜田巽櫓	0.2km	1.4km	3分	4分	61分	3.4m
⑥	大手門（三の丸大手門）	0.5km	1.9km	10分	10分	81分	3.3m
⑦	大手三之門（下乗門）	0.3km	2.2km	5分	6分	92分	5.5m
⑧	同心番所	0.1km	2.3km	5分	2分	99分	6.0m
⑨	百人番所	0.1km	2.4km	5分	2分	106分	6.8m
⑩	中之門（大番所）	0.1km	2.5km	5分	2分	113分	7.1m
⑪	中雀門（書院門）	0.3km	2.8km	5分	6分	124分	17.3m
⑫	富士見櫓	0.3km	3.1km	5分	6分	135分	20.1m
⑬	松の大廊下跡	0.3km	3.4km	5分	6分	146分	22.4m
⑭	富士見多門	0.2km	3.6km	10分	4分	160分	22.6m
⑮	石室	0.1km	3.7km	5分	2分	167分	25.5m
⑯	展望台	0.3km	4.0km	10分	4分	181分	24.1m
⑰	大奥跡（芝生広場にて昼食休憩	0.3km	4.3km	45分	4分	130分	20.0m
⑱	天守台	0.1km	4.4km	10分	2分	142分	28.1m
⑲	北桔橋門	0.2km	4.6km	5分	4分	151分	17.6m
⑳	清水門	0.8km	5.4km	5分	16分	172分	6.7m
㉑	田安門	0.5km	5.9km	5分	10分	187分	25.9m
通過	北桔橋門→梅林坂						
㉒	平川門	1.0km	6.9km	10分	20分	217分	4.6m
㉓	和気清麻呂像	0.7km	7.6km	5分	13分	235分	3.2m
㉔	将門首塚（大手町）	0.5km	合計8.1km	10分	10分	合計255分	3.7m

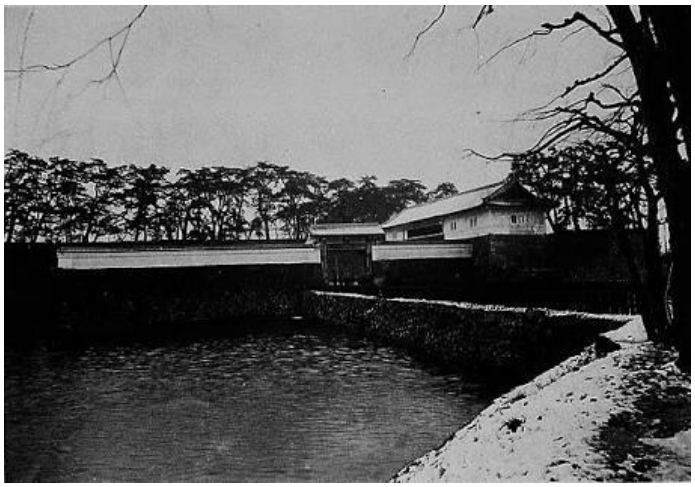
①～⑤は皇居外苑（皇居前広場）です。
⑥～⑲、㉒は皇居東御苑です。※月＆金は休園です。
⑳、㉑は北の丸公園です。
㉓、㉔は平川門よりお堀を眺めながら内堀通りを歩きます。

神田警察通り
401
竹橋JCT
402
C1
竹橋
東京メトロ半蔵門線
千代田区
千代田
403
404
日比谷通り
二重橋前
皇居外苑
皇居前鍛冶橋線
20
1
桜田門
内堀通り
丸の内仲通り

①桜田門（外桜田門）

桜田門は、江戸城を防御するための内堀の門の一つで、桜田堀と凱旋堀の間にあります。
現在の門は、1663年（寛文3年）に再建されたのが、1923年（大正12年）の関東大震災で一部破損し復元されたものです。1961年（昭和36年）「旧江戸城外桜田門」として国の重要文化財に指定されました。名前は、この辺り一帯を桜田郷と呼ばれていたことが由来といわれてます。
外側（警視庁側）の小さい門を高麗門（第1門）、内側の大きい門を渡櫓門（第2門）で構成され桝形と言われ防御性の高い城門となっております。江戸城の多くの城門が、この形を採用しています。
1860年3月3日（旧暦）に大老井伊直弼が暗殺される、桜田門外の変がこの門の付近でおきました。
水戸浪士17名と薩摩浪士1名により、登城中の大老井伊直弼の行列60名を急襲し暗殺しました。
発砲により重傷を負った直弼を薩摩浪士の有村治左衛門が、駕籠から引きずり出し首級をあげたとの事、治左衛門も首級を取り返しに来た彦根藩士に後頭部を斬りつけられ自らも重傷となり、和田倉御門の外側（現在の日比谷通り）から辰ノ口を通り遠藤但馬の守邸前で力尽き、自刃しました。
一橋徳川家、慶喜の元へ向かったと思います。直弼の首級は、遠藤家より井伊家へ返還されてます。
初代彦根藩主、井伊直政は関ケ原の合戦にて、「島津の退き口」薩摩に鉄砲で撃たれた傷口が原因で亡くなっているので、初代と15代が薩摩に討たれたことになります。
襲撃した浪士側ですが、一人が闘死、明治まで生き残った者2名以外は自刃、捕縛又は自訴し斬首、この襲撃者らを「（桜田）十八烈士」と呼ぶこともあります。
襲撃された彦根側ですが、暗殺された直弼以外に即死者4名、重症にて帰邸後死亡4名、重症者は彦根藩領下野の国佐野へ流罪幽閉、軽症者は全員切腹、無傷の士卒は全員が斬首家名断絶という厳しい処分が下さりました。彦根藩は井伊直弼の腹心だった二名を斬首したが、35万石から25万石へ減封と京都守護の家職を剥奪されました。この事件により、徳川幕府の権威は失墜し、尊皇攘夷運動が盛んになった様です。1862年、京都守護職が設けられ会津松平家が任命され、幕末の悲劇に繋がっていきました。
※　井伊掃部頭直弼の掃部頭（かもんのかみ）とは、官職の一つで律令時代は、宮中行事に際して設営を行う又は清掃を行うところの頭（長官）。ちなみに直弼の官位は正四位上でした。
※　水戸学とは、水戸徳川家二代藩主　光圀公が編纂を開始させた「大日本史」初代神武天皇～南北朝統一時の100代後小松天皇迄の治世を扱う史書が元になっていて大義名分論とする尊皇論で貫かれており幕末の尊王攘夷思想に大きな影響を与えたと言われてます。
水戸徳川家は、朝廷と幕府に揉め事が有った時は、朝廷の味方をする事と、言う家訓が有ったとか慶喜公が、「錦の御旗」を見た途端、新政府に恭順の意を示したのは、自身も水戸学にて尊皇思想が強かったんでしょうか・・・。
※　1968年　昭和43年10月29日（井伊直弼の誕生日）に彦根、水戸の両市は当時の敦賀市長矢部知恵夫氏の仲裁？（提案）により親善都市提携を結んだそうです。
※　江戸城の城門数は36見附と言われていますが、実際にはもっと有った様です。その数は66とか92有ったとか、諸説あります。

雪の外桜田門古写真



②皇居正門（西の丸大手門）二重橋

現在、この場所は皇居正門と言われ、手前のめがね型の橋を「正門石橋」、奥にある鉄橋を「正門鉄橋」と言います。手前の石橋は江戸時代は木橋だったそうで、昭和になってから石橋に架け替えたそうです。奥側の鉄橋も江戸時代は木橋で、橋梁が御堀（二重橋濠）より、かなり高い位置になるため橋脚の強度を増すため二階建て構造になっていました。二階建て（二重構造）の橋なので、「二重橋」と言う名前の由来となってる様です。今では、皇居正門を総称して「二重橋」、手前の石橋を「二重橋」と呼ばれる事もありますが、正式には奥の鉄橋のみが「二重橋」だそうです。江戸時代、この場所は「西の丸大手門」と言われ、二重橋を下乗橋とし、入城者は駕籠や馬等の乗り物から降りて徒歩にて入場しなければなりませんでした。現代では、各国の新任大使が皇居を訪れる際の送迎の馬車は下乗することなく宮殿（長和殿）前まで、乗車してる様です。

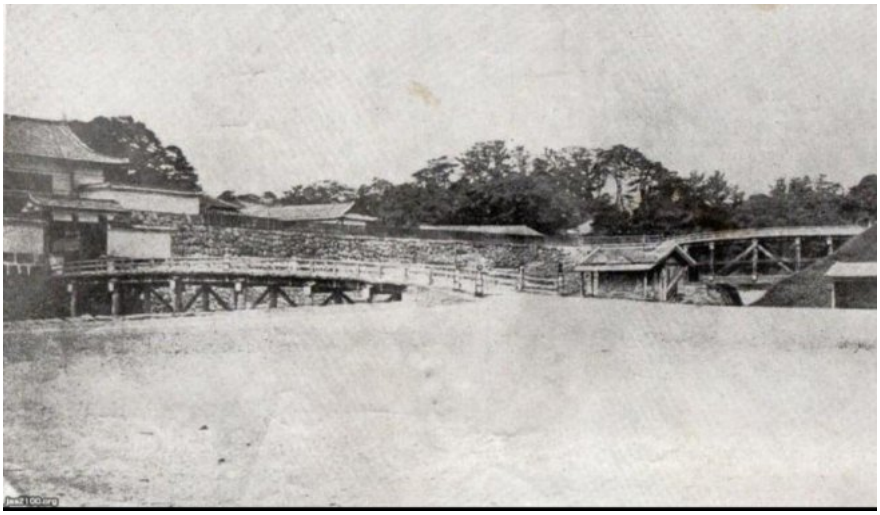
鉄橋の奥に建つ、白い建物は伏見櫓（別名月見櫓）と呼ばれ三代家光の時代に京都の伏見城より移築されたのが、名前の由来と言われてますが、定かではないそうです。関東大震災で損壊した後解体して復元されてます。

皇居正門は、一般参賀（1月2日及び2月23日天皇誕生日）の時は入場門となるので、一般の人も入門する事が出来ます。又、宮内庁が実施している皇居一般参観では、正門鉄橋がコースになっていますので、ゆっくりと見学する事が出来、伏見櫓を目の前で見ることもできます。

明治天皇が、初めて江戸に行幸したのは、1868年11月26日（旧暦　明治元年10月13日）満15歳の時で、同日に江戸を東京に江戸城を東京城と改称しました。一旦京都に還幸後、翌年再び東京に移り、生涯、東京に居住していたそうです。

※ちなみに正式な、東京遷都は行われていないそうです。

皇居正門
古写真



二重橋
伏見櫓

③坂下門

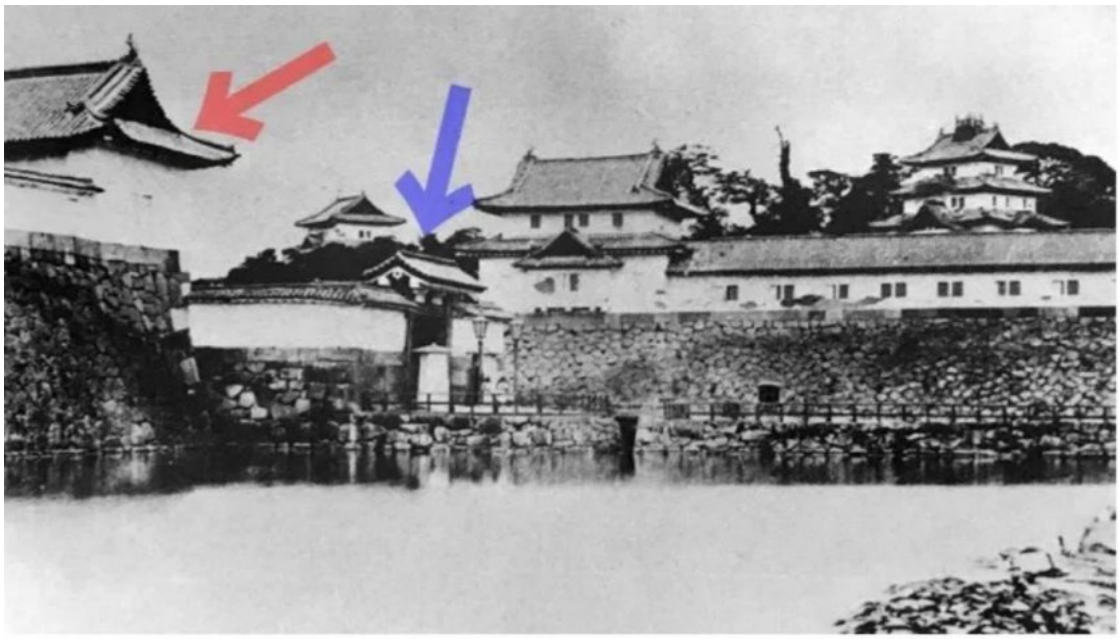
江戸時代より「坂下門」と呼ばれています。現在では宮内庁の正面玄関とされています。名前の由来は、西の丸（現長和殿）から坂を下った所に有る門だからだそうです。

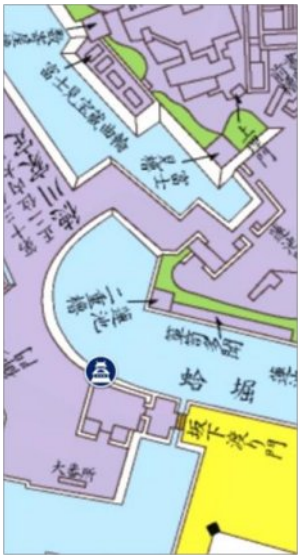
この門は、一般参賀の出場門及び春と秋の乾通り通り抜けの入場門になっていますので、一般人が通行することも出来ます。この門の特色としまして、渡櫓門が正面を向いていて桝形になっていません。江戸時代は、木橋を渡り、正面に高麗門が有り、入って左側に渡櫓門が右向きに建ち、桝形を構成してましたが、明治になり宮内庁の玄関口となるために改修して、正面に渡櫓門を移築し使い勝手を良くした様です。

１８６２年文久２年２月１３日（旧暦１月１５日）にこの門の付近で、坂下門外の変と言う事件が起きました。尊王攘夷派の水戸浪士６人が、登城中の老中　安藤信正の行列を襲撃しました。信正は背中に傷を負いました（軽傷）が、城内に逃げ込んだ。襲撃側の浪士６人は、目的を果たす事無く、全員闘死。遅刻して襲撃に参加出来なかった、川辺佐次衛門は長州藩邸に斬奸趣意書を届けた後、切腹した。警護側（磐城平藩）は、十数人の負傷者を出したが、死者はいなかったそうです。

※斬奸（ざんかん）趣意書とは、悪者を切り殺す際にあたっての、もとにある考えや主なねらいを書き記した書。

坂下門付近の古写真　　左↓は渡櫓門、右↓は高麗門
正面に蓮池二重櫓、右奥に富士見櫓（現存）、高麗門の上部に
見えるのは、松の大廊下付近に有った数寄屋櫓と思われます。





④桔梗門（内桜田門）

この門は、諸侯（大名）が登城する際、三ノ丸に入る門の一つでした。通称名桔梗門、正式には内桜田門と言います。現在は皇居警察本部の通用門や皇居一般参観の入退場門となりますので、一般の方の通行も可能です。桔梗門の名前の由来は、1456年に最初にこの地に築城を始めた太田道灌の家紋、桔梗が入った瓦が残されていたことから、桔梗門と呼ばれたそうです。

太田道灌は、扇谷上杉家に家宰として仕えていましたが、優秀すぎたため主君に暗殺されてしまう悲劇の武将とも言われています。

「七重八重　花は咲けども山吹の　実のひとつだに　なきぞあやしき」この歌は平安時代に第60代醍醐天皇の第11皇子兼明親王が詠まれた歌です。≪八重に咲き誇る山吹なのに実が無いのは不思議だ≫と言う意味だそうです。

ある日鷹狩りに出かけた道灌は、大雨にあってしまい、貧しい家に駆けこみ「簑を貸してもらえぬか」と声をかけると、少女が出てきてきました。少女が差し出したのは簑ではなく、山吹の花一輪でした。意味が解らず、道灌は怒って大雨の中を帰ったそうです。後に道灌は、近臣の一人から兼明親王の詠まれた、山吹の歌の内容を聞き、「実の一つだになきぞ」を「簑一つだになきぞ」に変え、お貸しできる簑は無いですと、山吹の花一輪を差し出し、伝えたかった事に気づき、自分に和歌の知識が無い事を恥じたそうです。この少女は紅皿と言う名前で、後に道灌より江戸城に招かれ、和歌を習ったとか生涯に渡って、親交が合ったと言う逸話もあります。貧しくて、簑の一つも無い悲しい山吹伝説が、「七重八重　花は咲けども山吹の　みのひとつだに　なきぞかなしき」と最後の部分が「あやしき」から「かなしき」へ。江戸時代に入り、後拾遺和歌集の流布本も『かなしき』が多くなった様です。

きっと紅皿は楽しく無邪気な少女だったんでは、ないでしょうか？戦国武将相手にダジャレが出来るんですから、自分が思う山吹伝説は楽しく、ほのぼのした感じなんですが・・・。

山吹伝説の里ですが、豊島区高田、荒川区荒川や埼玉県入間郡越生町等の数か所に石碑等が有り、場所は定かでは無いそうです。

家康には側室が20人以上いたとされていますが、その中でお梶の方は太田道灌の玄孫と言う逸話が、あります。お梶は、聡明で「いちばん旨い物、いちばん不味い物共に塩」と答え家康及び重臣達を唸らせてます。理由は「塩で味付けすれば美味しくなるが、塩だけだと、塩辛くて不味い」。

その頭脳を買われて、関ヶ原の合戦や大坂の陣に騎乗に甲冑姿で同行したと言われてます。家康に関ヶ原の合戦後、この勝利はお梶のおかげだと、これからは「お勝」と名乗れと、改名したといわれています。子供を宿すことが、中々出来ませんでしたが、1607年（慶長12年）お梶30才で、家康の末子である五女市姫を出産するが、4才で夭折してしまう。不憫に思った家康は、側室お万の方が生んだ11男鶴千代（水戸徳川家初代頼房）の養母とした。水戸徳川家初代頼房や二代光圀等の教育にも関わり大日本史制作の礎の一つになったと自分は思っていますが・・・。

ちなみに側室お万の方（養珠院）は、10男長福丸（紀州徳川家初代頼宜）も産んでます。

※お梶→お勝→英勝院

⑤桜田巽櫓（桜田二重櫓）

この白い二層二階建ての建物は、桜田二重櫓、通称桜田巽櫓や巽櫓と呼ばれています。名前の由来は江戸城本丸より東南（巽）の方角にある櫓だからです。江戸城に残る、三つの櫓の1つで、三ノ丸の東南隅に建ちます。関東大震災で、倒壊しましたが再建され現在に至ります。櫓の目的は城を攻めてくる敵を監視したり、攻撃したりします。櫓内には非常時に備え、弓矢や鉄砲等の武器が保管されていたそうです。一層の屋根に八の字型の飾り屋根（切妻破風）を設け、その下に石落としがあります。

こうした櫓は、江戸城内に三層三階が六棟、二層二階が十棟、平屋建てが四棟が建っていたと、されています。（櫓数は諸説有）

⑥大手門（三ノ丸大手門）

この門は、旧江戸城の正門に当たり、将軍の出入りや勅使の参向などもこの門から行っていました。又、諸侯（諸大名）が、登城する際三ノ丸に入る門の一つになっていました。諸大名は内桜田門（桔梗門）又は大手門のいずれかを通過するんですが、予め登城する門は決められていた様です。上屋敷の所在地等が、考慮されていたみたいです。御三卿（田安、一橋、清水の各徳川家）は諸侯では無いので平川門より登城してました。

現在、高麗門前は土橋になっていますが、大正七年迄は大手橋という木橋が架かってました。高麗門を入ると、四角に囲われた桝形と呼ばれる広場があり右側に堅固な渡櫓門があります。桝形には曲輪の内側に構えた内桝形と外側に構えた外桝形あり、大手門は外桝形になります。右折の桝形の方が、防御性が高いと言われてます。1620年（元和6年）の江戸城修復時に伊達政宗等の普請により外桝形にしたそうです。その後、明暦の大火（1657年）で焼失、万治2年（1659年）に再建され、関東大震災（1923年）では大きな被害を受け、大正14年（1925年）に再建されました。昭和20年の戦災で焼失、昭和41年（1966年）の皇居東御苑一般開放に伴い昭和40年から復元工事が行われ高麗門等も修復され、江戸の昔を偲ばせる現在の大手門になりました。桝形の一隅に鯱（しゃち）が一基あります。頭部に「明暦三丁酉」と刻まれていることから明暦の大火で焼失後、万治2年に再建された、渡櫓門の屋根に上げられたものと推定されています。

橋の手前に下馬札が建ち、諸侯（大名）以上を除き駕籠や馬から降りなければなりませんでした。江戸時代大手門の警固は、十万石以上の譜代大名が受け持ち、『徳川盛世禄巻之二』によると、鉄砲30丁、弓10張、持弓2組、持筒2丁、長柄槍20筋が常備されてました。城壁の内側に狭間に上る七段の狭い階段が設置されているのが、目をひきます。

現在は皇居警察が警固を担当し、昭和43年（1968年）より大手門、平川門、北桔橋門の三か所を出入口とし、皇居東御苑を一般公開していますので、一般の人も通行する事ができます。

※御三卿とは8代徳川吉宗が、将軍家の跡取りを絶やさない様に設けました。田安家は吉宗の次男宗武、一橋家は四男宗尹（むねただ）、清水家は9代将軍家重の次男重好を家祖としてます。

※御三家とは初代徳川家康が、宗家に跡取りが無い時は、尾張徳川家か紀州徳川家から出す様にと決めました。当初は宗家、尾張、紀州で御三家と呼ばれてましたが。5～6代頃より宗家の跡取りが、乏しくなってきたので、水戸家を仲間入りさせて、尾張、紀州、水戸の三家で御三家となりました。それぞれの家祖は、尾張徳川家　家康9男義直、紀州徳川家10男頼宜、水戸徳川家は11男頼房が家祖ですが、御三家になった頃には水戸徳川家3代綱條（つなえだ）の時代ですね。

※徳川歴代将軍の中で、実子の跡取りが無い将軍は、4代家綱、5代綱吉、7代家継、10代家治、13代家定、14代家茂と決して少なくないんです。

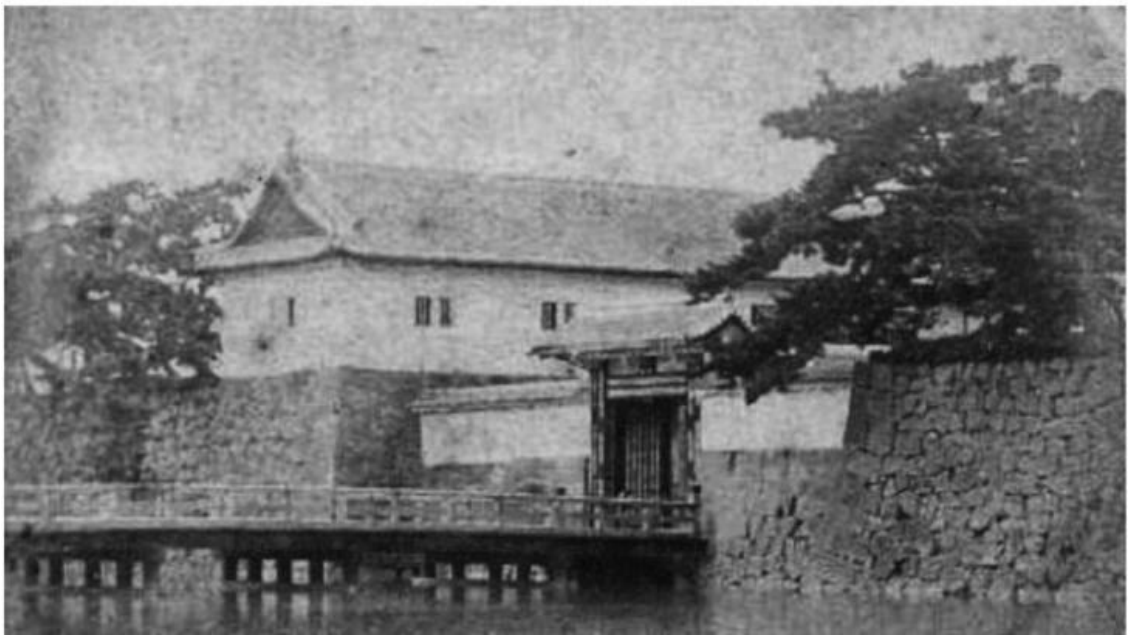
大手門（三ノ丸大手門）古写真

⑦大手三の門（下乗門）⑧同心番所

この場所には、下乗門と言われる三ノ丸から二ノ丸へ入る城門が、有りました。三ノ丸と二ノ丸の堺には水堀が有って、高麗門の手前には木橋が架かり、この橋は下乗橋と言われ、桔梗門又は大手門より登城してきた御三家以外の大名は、駕籠より降りて、ここから徒歩で本丸御殿まで、登城しなければなりませんでした。現在は木橋が無くなり、御堀も埋め立てられ、すっかり様変わりしましたが、石垣が現存しているので、往年を偲ぶ事ができます。左折型の桝形内に入ると、右側に同心番所と言う建物があります。この建物は江戸時代には木橋の手前右側にありました。現在の三ノ丸売店の向かい側、三ノ丸尚蔵館（しょうぞうかん）の斜め右前辺りに、建っていたものを移築したと言う事です。木橋が撤去され御堀が埋め立てられたのが大正8年（1919年）頃、尚蔵館が開館したのが平成5年（1993年）と言われてます。同心番所は、大手三の門を警備する番所で、主に大名の家来衆を監視してました。各門を通過するごとに供の人数が減らされ、本丸御殿に到着した時には、刀番と草履取の二名となったそうです。諸侯の登城日には主君の下城を待つ家臣や中間達で、大手門や大手三の門付近は大変な賑わいを見せたそうです。暇を持て余した家臣達は、他家の家臣達と他愛もない雑談をしました。他家の殿様の噂話等、『下馬評』の語源と言われてます。
※同心と言う、幕府の下級武士が警備を担当し、鉄砲25挺と弓25張が装備されてました。
※同心番所の鬼瓦には徳川家の三つ葉葵紋が、残ってます。

大手三の門古写真

同心番所



⑨百人番所

百人番所は、江戸城本丸御殿への最後の固めで、最大の検問所として睨みを利かせていました。鉄砲百人組と呼ばれた根来、伊賀、甲賀、二十五騎の四組が交代で詰めていました。各組とも与力20人同心100人が配属され、昼夜を問わず警固に当たっていました。南北45メートルほどの長大な百人番所の屋根瓦は、昭和30年代に修復されましたが、それ以前は雑草等が生え、それなりの風情があったそうです。
※百人組は将軍が寛永寺や増上寺に参拝する際には山門前を警備するなど幕府直轄（若年寄支配）の独立部隊として編制されてました。伊賀組は、伊賀上野の服部半蔵が率いた伊賀武士の集団です。甲賀組は滋賀県南東部、甲賀市に有った甲賀武士集団です。根来組は和歌山県那賀郡の根来寺の僧兵を中心とした紀州の鉄砲軍団です。二十五騎組は黒田家家臣によって編成された精鋭軍団です。百人組の組屋敷は、すべて甲州街道沿いにあり、伊賀組は大久保、甲賀組は青山、根来組は市ヶ谷、二十五騎組は新宿に有りました。徳川家康は、有事の際には半蔵門より抜け出し新宿から甲州街道を通り幕府直轄領である、甲府へ逃れる構想を立てていました。百人組には、こうした有事の際の護衛の任務もあったそうです。

⑩中之門（大番所）

百人番所に背を向けると目の前にむき出しの石垣が連なって石の殿堂の趣きだが、昔は櫓や多聞が、びっしりと建ち並んでいたので、今見る風景よりもはるかに威圧感があったと思われます。右方向は銅（あかがね）門を抜けると、白鳥濠、二の丸庭園や二の丸雑木林があります。左の石垣にむかうと、立派な切石を高く組み合わせた中之門の跡があります。たびたびの地震等で変形したため、平成17年から19年にかけて修復工事が行われました。足下には、門柱跡の丸い穴が穿たれた石が四つ並び、元の門の下には江戸時代のままという貴重な石畳が、しかれています。石畳の両側にも門柱の穴が四つあります。中の門の石垣は江戸城の中でも最大級と言われる（推定35t）巨石が、使用され目地がほとんど無い、切込みはぎ・布積みの石垣です。1658年（明暦4年）に肥後の細川家が、瀬戸内海沿岸や紀伊半島の石（花崗岩）を船で運び、普請したのが、ルーツとなっています。
中の門を通過すると右側に大番所と言う建物があります。他の番所より格が高く、身分の高い与力や同心が詰めてました。建物は、昭和41年皇居東御苑の開園に合わせ復元されたものであるが、立派な建物で風格があります。背後の十五段の石段は中之門の修復時に一緒に修復されてます。
※御三家もこの門で、駕籠を降りて徒歩にて本丸へ向かいました。

中の門付近の古写真

⑪中雀門（書院門）

別名書院門ともいわれ、本丸への最後の門です。左上の石垣には重箱櫓と書院二重櫓があり、来る物を圧倒しました。昔は坂下に二の門があり、現在はスロープになっている坂道は石の階段であったそうです。坂を右に曲がると中雀門跡があります。足下には三対の門柱の石があり、それぞれの石には丸と角の二つの穴があります。両側の石垣はボロボロで、稲妻状の裂け目、円形の割れ目、あるいは人面に変形し、しかも真っ黒に焼けています。1863年（文久三年）、本丸御殿が、火災で焼失した時に類焼した痕と考えられ、150年が過ぎた現在も火災のすさまじさを物語っています。
1863年の火災で本丸御殿焼失後、再建されませんでした。1868年の江戸無血開城した時の本丸は、一面の焼け野原だったと言われてます。現在、2本のケヤキがそびえている辺りが、本丸御殿の正面玄関のあった場所とのこと。
中雀門という意味深長な名前は、扉に真鍮（しんちゅう）の化粧金具を取り付けた鍮石門（ちゅうじゃくもん）からきてるのか、南方を守護する神獣・朱雀（すざく）から朱雀門の転訛等、諸説あります。高価な真鍮を張り付けた門は、日本中探しても、城門としてはここだけなんです。
中雀門跡から本丸に入って左側に果樹古品種園があります。江戸城の跡に江戸時代の果樹の品種を植えれば、訪れる人々にとっても、興味深いのではないかとの上皇陛下のお考えを受けて、今は余り見られなくなった古い品種の果樹が植栽されています。ニホンナシ、モモ、スモモ、カンキツ、カキ、ワリンゴが植えてあります。その一部は、上皇上皇后両陛下がお手植えになられたそうです。

⑫富士見櫓

富士見櫓は、江戸城本丸では現存する唯一の櫓で、遺構の中では最も古いものに属するといわれています。1657年の明暦の大火で焼失し、1659年（万治二年）に再建され、関東大震災で倒壊したが、1925年（大正十四年）に主要部材に旧来の材料を用いて再建されました。唐破風、切妻破風と、蓮池堀の高石垣側に石落としを備えた、三重櫓はどこから見ても同じに見えることから『八方正面の櫓』と呼ばれる立派なものでありました。江戸城は明暦の大火後、天守閣が再建されませんでしたので、この富士見櫓が天守閣の代用とされてました。歴代将軍も、富士見櫓より品川方面の海を眺めたり、両国の花火を見物されたそうです。
※『八方正面の櫓』と呼ばれてましたが、本丸側からは質素に見えます。
※両国川開きに初めて花火が打ち上げられたのは1733年（享保18年）旧暦の5月28日鍵屋の弥兵衛が、打ち上げたとされています。両国川開きとは、火事の多かった江戸の町の火除け地として両国橋たもとの広小路や大川（隅田川）端に、旧暦の5月28日から8月28日の間、夜店や屋台の出店が許された納涼期間の初日。

中雀門の古写真

乾通り、宮内庁前辺りから
撮影した現在の富士見櫓

唐破風
切妻破風
石落とし

⑬松の大廊下跡

本丸の西側、富士見櫓と富士見多門の間に、本丸御殿の大広間と白書院（将軍との対面所）をつないだ松の大廊下がありました。江戸城で二番目に長い廊下だったといわれ、西へ19メートル、北へ31メートル、幅は約5メートルの畳敷で、障壁画に「松」を主題にした絵が描かれていたことから『松の大廊下』と呼ばれ、1863年本丸御殿が焼失するまでは、マツに群れ飛ぶ千鳥の障壁画が、大廊下を飾っていたそうです。

※江戸城で一番長い廊下は、柳の間西廊下といわれてます。

１７０１年（元禄１４年）３月１４日ここで、大事件がおきました。播州赤穂城主、浅野内匠頭長矩が、高家旗本、吉良上野介義央に突然、斬りかかりました。上野介は軽症だったが、殿中での刃傷は御法度だったため、内匠頭は即日切腹と言う厳しい処分が下さりましが、上野介には何のお咎めもありませんでした。内匠頭が斬りつけた理由は、上野介が高慢で強欲だったという説、赤穂と吉良の塩田争いが遠因という説など、諸説あります。播州浅野家は取り潰しになり、家臣たちは浪士となりました。浅野家再興の願いも退けられた浪士達は、筆頭家老・大石内蔵助良雄を頭に、亡君の仇討ちを計りました。元禄１５年１２月１５日未明、午前４時頃、四十七士は本所（現在の両国）の吉良邸へ討ち入り、本懐を遂げました。『忠臣蔵』は、映画、テレビ、小説などで様々に描かれています。

※両国の江戸東京博物館に松の大廊下、白書院等江戸城の精巧なジオラマが展示されてますので機会がありましたら、ご覧いただければと思います。又、両国には吉良邸の一部が、本所松坂町公園として残されています。両国を訪れた際には、当時を偲ぶことが出来ますので、是非足を運んでみて下さい。

※浅野内匠頭長矩の内匠頭（たくみのかみ）とは、律令時代の官職の１つで、宮中の器物造営、殿舎の装飾をつかさどった役所の頭（長官）。

※吉良上野介義央の上野介（こうずけのすけ）とは、律令時代の官職の１つで、上野国は、上総国、常陸国と共に親王任国のため介が、他国の国守と同列に扱われた。事実上の国司（長官）。

浅野内匠頭は、播州赤穂５万３千石の城主で、官位は従五位下。吉良上野介は、４千２百石の旗本なのに従四位上です。石高では、浅野内匠頭の方が１０倍以上ですが、官位は吉良上野介の方が、５段階も上なんです。

松の大廊下の模型
（両国江戸博物館）

本所松坂町公園
東京都墨田区
両国　３－１３－９
JR両国駅より徒歩5分

⑭富士見多聞

多聞は、防衛と装飾を兼ねた長屋造りの櫓の一種で、武器庫であります。中には鉄砲や弓矢が納められていました。江戸城の本丸には15棟の多聞が有ったそうで、富士見多聞は、その中の唯一の遺構であります。蓮池濠から富士見多聞までの石垣は、高さが約20メートルにもなる長大なもので、実戦的だったと言われています。

乾通りからの富士見多聞

⑮石室(いしむろ)

富士見多門の北側、蓮池濠を背にした木立の陰のひっそりとした所に石室があります。江戸城の遺構の中では比較的小さいもので、表の石組には焼けたような痕があり、多少ずれている。入口には扉を取り付けた穴があり、暗い内部は20平方メートル程の広さで、伊豆半島産の安山岩『伊豆石』の切石で、すき間もないほど、キッチリと壁が作られています。天井には長方形の石の板が使われています。江戸城の抜け穴とか、後金蔵（ごきんぞう）という説もありますが、大奥御主殿・御納戸の脇という場所柄から、非常時に大奥の調度品や文書類など、貴重品を納めた富士見御宝蔵の跡と考えられています。ちなみに御金蔵は、富士見櫓石垣下の近くにあったそうです。

⑯展望台（台所前三重櫓跡）

江戸時代ここには、台所前三重櫓が、建っていました。最後の本丸御殿が再建されて4年後の1863年（文久三年）台所前三重櫓は、本丸御殿の火災で類焼しました。その後、再建されなかったので、現在は展望台になっています。ここからの眺めは広大で高い石垣の下は白鳥濠で、その先には二の丸雑木林と二の丸庭園があり、四季の移り変わりがよく分かる場所であります。そして、最大の特徴は皇居と外のビル街が一体となった景色が見られる場所ということであります。

※二の丸雑木林は昭和天皇の御発意により、都市近郊で失われていく雑木林を皇居内へ造ろうと、1983年（昭和58年）から3ヶ年かけて造成されたものであります。造成にあたっては、開発が予定されていた雑木林の表土を運び込んだので、植物の種子や根、昆虫や土壌生物も一緒に運ばれてきましたので、より自然に近い環境が復元されています。2002年（平成14年）上皇陛下のお考えを受けて、雑木林を拡張されました。これが新雑木林で、そのなかに小さな流れが造られ、水辺の植物も観察できるようになりました。

※二の丸庭園は1867年（慶応三年）最後の二の丸御殿が焼失し明治中期以降は、馬場や馬車庫、厩舎などの施設がありましたが、東御苑の公開・整備にあたって、残されていた九代将軍家重の時代の庭の絵図面をもとに、回遊式庭園が復元されました。池の前に、二の丸庭園の目玉ともいえる菖蒲田があります。毎年、5月下旬から6月上旬に開花し、東御苑の人出が最も多くなるそうです。

※中奥・大奥の食事は台所役人が作りました。御広敷膳所台所頭が献立に携わり、御台所人が調理をし、御賄組頭が料理の指図をしました。その他に御賄組吟味役、御賄方などがいて、総勢70人くらいだったと、いわれてます。将軍一人のために、毎食十人前の料理が用意され、そのうち毒見で二人前が消え、七人前が予備として次の間に置かれ、残る一人前が将軍の御前に運ばれました。

ちなみに登城してくる大名やお供達には食事は、用意されませんでした。お弁当を持参したり、昼八つ時（午後2時頃）には下城になるので、お弁当を持参しない諸侯も多かったとか・・・。

城内で働く役人達の食事は、総菜（おかず）のみ配給されたので、ご飯は持参していた様ですが、何故か、夜詰め（夜勤）の時はご飯も配給されたそうです。

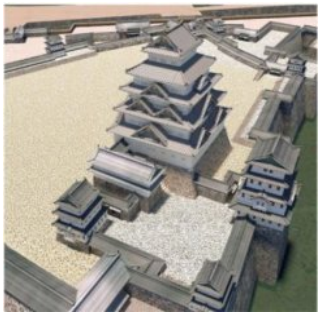
⑰大奥跡（本丸芝生広場）

江戸城本丸は表、中奥、大奥に三大別されます。政務を執る公の場所が表であり、将軍の私的な居住空間を中奥といい、ここでは小姓、近習など、男性だけが奉仕しました。そして、天守台側に大奥がありました。大奥御殿も度々火災で炎上し、規模や形は変わっていますが、本丸芝生広場の約半分程の敷地に、ビッシリと大奥御殿の殿舎が立ち並んでいたことを想像すると、その規模の大きさが分かると思います。武家社会では表と奥の区別がうるさく、高い身分の武家の妻子は奥御殿に住み、みだりに男性が立ち入ることは許されませんでした。奥様、奥方と言う呼び方は、本来は武家社会で使う言葉でありました。大奥は将軍の正妻御台所（みだいどころ）を始め、女性だけが住む御殿で、中奥と大奥は御鈴廊下のみで結ばれていたそうです。最盛期には、奥女中など大奥に仕える者は2，000人を超えたと伝えられています。三代将軍家光の乳母（うば）のお福は家光が元服してからも側に仕え、家光の生母お江与（お江）の方（崇源院）の死後、『大奥総取締役』に命じられます。更に、朝廷から『春日局』の称号を賜り、大奥は固より表の政治にまで権勢をふるいました。お福の悩みは家光に世継ぎが、出来ないこと。女性嫌いの家光が気に入りそうな娘を自ら探し、多くの側室候補を大奥に招き、努力の甲斐があって、五男一女を儲けることが出来ました。（男子二人は夭折）
江戸城大奥の礎を築いたお福の父は、美濃国の名族斎藤氏（美濃守護代）の一族で、明智光秀の重臣であった斎藤利三で、母は稲葉良通（一鉄）の娘である安、又は良通の姉の娘於阿牟（おあむ）で1579年（天正7年）兵庫県丹波市で、生まれました。お福四歳の時に本能寺の変があり、父利三は謀反人として処刑されてしまいます。お福は母方の実家である稲葉家へ引き取られ、成人するまで美濃で過ごしたと思われ、その後母方の親戚に当たる、三条西公国に養育され、これによって公家の素養である書道・歌道・香道等の教養を身につけることができました。その後、伯父の稲葉重通の幼女となり、稲葉氏の縁者で小早川秀秋の重臣である稲葉正成の後妻となりました。正成は関ケ原の戦いにおいて、主君の秀秋を説得して小早川軍を寝返らせ、東軍を勝利に導いた功労者でした。26才で、四男を生んだばかりのお福は、二代将軍秀忠の嫡子の乳母の募集を知り、京都所司代板倉勝重の推挙を受け、夫の正成と離縁し、長男の正勝のみを連れ江戸へ下りました。乳母の選考にあたり、お福の家柄及び公家の教養と、夫・正成の戦功が評価されたと言われています。
※大奥で出世するためには引き・運・女が、必要不可欠とされています。歴代奥女中の中で、一番出世した女中は、お玉（桂昌院）と言われています。京都で1627年（寛永四年）に青物屋の娘として生まれたと伝わります。幼い頃、父が他界し、母とお玉は世間の荒波に放り出された。農家で野菜を仕入れては、母子で荷車を押して売り歩く日々。お玉が10歳を過ぎた頃、人生の転機となる一つの幸運が舞い込みます。母が武家の名門、本庄家の飯炊き係として、職を得ました。働き者で器量良しの母はその後、妻を亡くした本庄家の当主に見初められ、後妻に迎えられました。青物屋の娘から武士の娘へ、厳しい躾で武家の作法を徹底的に叩き込まれた様です。その甲斐あってか13歳の頃お玉は本庄の父に江戸城の大奥へ行くように言われます。本庄家が仕えていた公家、六条家の娘お万の方（永光院）が、将軍家光の側室に決まり、その身の回りの世話係としてお玉に白羽の矢が立ったのです。お玉は、不安を抱きながらも江戸へ旅立って行きました。慣れない大奥で、お玉は側室の世話係、いわゆる部屋子として懸命に働いていました。そんなお玉に更なる幸運が、大奥の一切を取り仕切る最高権力者・春日局の目に留まり、自分の部屋子になるように命じられました。未だ、世継ぎの出来ない家光の側室候補として、秋野という候名（かぶりな）を与え、直々に教育をしました。側室候補に庭先を歩かせ、将軍に内々にお目通りする『御庭拝見』。お玉は見事、家光に気に入られました。ついに、青物屋の娘が、将軍の側室へ、お玉17歳の時でした。
1646年（正保三年）20歳のお玉は、男の子を産み、その子は徳松と名づけられました。しかし家光には、すでに二人の男子がいたため、徳松の地位はあくまでナンバー3でした。
1651年（慶安四年）、家光が没し、長兄・家綱が11歳で四代将軍の座に就きました。家光の死により仏門に入ったお玉は、以後桂昌院と名乗るようになり、徳松と共に大奥を離れました。1653年（承応二年）徳松は七歳で元服、名を綱吉と改めました。そして、館林25万石の城主となり、神田の江戸屋敷にて母子水入らずで、ひたすら学問と仏門への帰衣にうちこみ、30年近い年月が過ぎました。
1680年（延宝八年）五月。すでに死の床にあった家綱は、次期将軍を綱吉にすると命じました。ここに五代将軍、徳川綱吉が誕生しました。青物屋の娘が、将軍の生母へ、お玉（桂昌院）54歳の時でした。将軍の母として江戸城へ、大奥は固より、表の政務も、思い通りに動かすことの出来る、絶大な力を手に入れました。1684年（貞亨元年）11月に従三位を、1702年（元禄15年）2月には女性の最高位、従一位の官位と藤原光子と言う名前を賜りました。実家の本庄氏は、桂昌院の威光により、その一族は小藩ながら、大名として立身出世を果たしています。身内女性の引きによる大名出世を蛍大名と言ったりします。1705年（宝永二年）6月に、お玉79歳の天寿を全うしました。
※埋葬された増上寺で、将軍家の墓地が改装された際に遺骨の調査が実施され、血液型はA型で、四枝骨から推定した、お玉の身長は146．8cmと記録されています。（江戸時代女性平均144cm）
※大奥には、御褥御免（おしとねごめん）と言う、慣習がありました。江戸時代には30才を超えると女性機能が低下すると考えられ、30才になったら正室も側室も将軍との夜のお相手を辞退しました。

⑱天守台

江戸城天守閣は三回建てられた歴史を持っています。
◇慶長の天守閣＝1606年（慶長十一年）、家康が本丸を石垣造りに変える大普請の際に建てたもので、中央部の富士見多聞寄りにありました。五層の天守閣、全体の高さは国会議事堂とほぼ同じだったと言われています。1622年（元和八年）に撤去されました。
※国会議事堂の高さは、64．45mです。
◇元和の天守閣＝1622年（元和八年）、二代将軍秀忠の本丸改造の際、慶長の天守閣を撤去し、北曲輪を取り込んだ、現在の天守台付近に新しく建てることになり、翌元和九年に完成しました。天守閣の高さは、慶長の天守を上回っていたとされています。
◇寛永の天守閣＝1638年（寛永十五年）、三代将軍家光のとき、元和の天守台を改造した現在の天守台地に、金の鯱を載せた、地上より鯱までの高さ58m、五層の天守閣に建て替えられました。
◇幻の天守閣＝1657年（明暦三年）明暦の大火（振袖火事）で、寛永の天守閣が焼失した翌年、加州（加賀国）前田家の普請によって築き直された土台が、現存する天守台です。それまでの天守台より一間低い約12m、花崗岩を使用し、切込み接で綺麗に積まれた石垣です。ところが、天守台が出来上がったところで、天守閣建設は延期され、その後再建されることはありませんでした。幕府の重臣で四代将軍家綱の叔父にあたる保科正之が戦国の世の象徴ともいえる天守閣はもはや時代遅れ、物見のためだけにしか用をなさず、むしろそれより城下の復興を優先させるべきと提言したもので、江戸城に蓄えられていた金銀は大名屋敷の移転や火除地となる広小路の整備、避難しやすい様に橋の増設など、城下の復興に使われたと、伝えられています。
※明暦の大火とは、火元とされる本郷丸山（現、文京区本郷5丁目）本妙寺で、恋煩いで亡くなった娘・梅乃（数え17歳）の呪われた遺品の振袖を焼いて供養するため、住職が読経しながら護摩の火の中に振袖を投げ込むと、にわかに北方から一陣の狂風が吹きおこり、裾に火のついた振袖は人が立ち上がったような姿で空に舞い上がり、寺の軒先に舞い落ちて火を移した。たちまち大屋根を覆った紅蓮の炎は突風に煽られ、燃え広がり江戸の町を焼き尽くす大火となりました。火事の原因が振袖なので、振袖火事と言われていますが・・・。本来、火元は老中・阿部忠秋の屋敷だったと言う説が、あります。「火元は老中屋敷」と露見すると幕府の威信が失墜してしまうため、幕府が要請して「阿部邸に隣接する本妙寺が火元」ということにして、振袖火事の作り話を広めたという説。これは、火元の本妙寺にお咎めが無かったどころか、大火前より大きな寺院となった事や大正時代に至るまで、阿部家が多額の供養料を施入してる事や、本妙寺は「本妙寺火元引受説」を主張している。
※保科正之は1611年（慶長16年）二代秀忠のお落胤で幼名は幸松、母は秀忠の乳母大姥局に仕える侍女お静（浄光院）で、人一倍嫉妬心の強かった、正室お江の方の目を盗んで、神田の竹村家（姉宅）で出産したと伝わります。その後、武田信玄の次女である見性院に預けられ、養育されました。幸松の出生は秀忠側近の老中、数名のみしか知らぬことであったといわれています。その後、1617年（元和三年）、見性院の縁で旧武田家家臣の信州高遠保科家当主保科正光が預かり、自分の子として養育されました。1631年（寛永八年）秀忠の命で幸松は、保科肥後守正之と名を改め正光の跡を継ぎ、高遠三万国の当主となりました。秀忠の死後、三代将軍家光はこの謹直で有能な異母弟をことのほか可愛がったそうです。1636年（寛永十三年）には、羽州（出羽の国）二十万石を拝領。1643年（寛永二十年）には奥州（陸奥の国）会津二十三万石へ転封し、親藩・会津松平家の家祖となりました。松平への改姓を勧められたが、養父・保科正光の恩義に報いるために生涯に渡り保科を名乗ったと伝わります。家光が死の床にあるとき、正之を枕頭に呼び寄せた際には、堀田正守に抱きかかえられ起き上がり、自らの口で『肥後よ、宗家を頼みおく、我が息子を頼むぞ』と、遺言しました。今まで、家光に取り立てて貰った恩義に報いるため、四代将軍家綱の後見職につきます。又正之は1668年（寛文八年）徳川あっての、会津松平家と、末代まで知らしめるために、『会津家訓15条』を制定しました。第一条には「会津藩たるは将軍家を守護すべき存在であり、藩主が裏切るようなことがあれば家臣は従ってはならない」・・・と記し、以降、藩主、藩士は共にこれを忠実に守りました。幕末の藩主・松平容保は、この家訓を頑なに守り、佐幕派の中心的存在として、戊辰戦争を戦い、数々の悲劇を生みました。

慶長の天守閣画



寛永の天守閣画

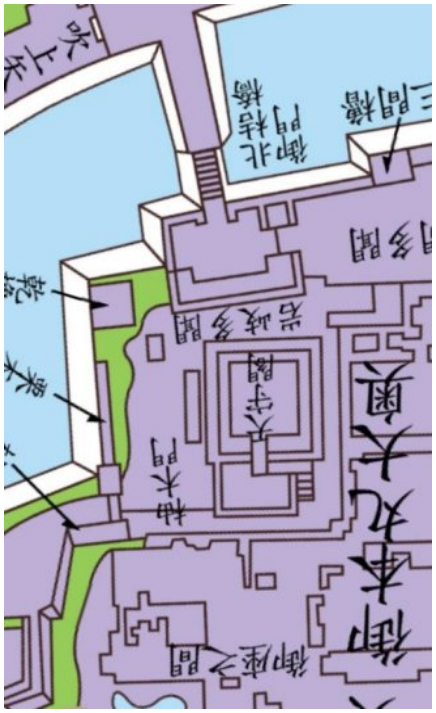
⑲北桔橋門

江戸城には橋を桔（は）ね上げて本丸への通行を完全に絶つ桔橋が二つあります。一つは、この北桔橋であり、もう一つは本丸と吹上方面をつなぐ西桔橋です。今に残るのは高麗門だけで、渡櫓門、多聞はないが、かつては渡櫓門と岩岐多聞、乾二重櫓に囲まれた、L字型（左折）のいかめしい内桝形でした。橋が桔橋でなくなったのは明治期以降と、伝わります。高麗門には桔ね上げるための滑車を吊るしたであろう金具が、残ってます。北の架け橋とも言われた桔橋の下は、深く削られています。本丸に近い重要地点だったので、石垣は堅固、雄大で高く、濠は深く、見事な眺めであります。石垣の高さは21mと伝わり、打込接ぎの乱積の工法で、江戸城では一番高い石垣であります。石垣の石をよく見ると、刻印の彫られたものが、あります。江戸城の石垣は、主に豊臣恩顧の大名家を中心に天下普請にて建造されましたので、他家の石と区別するために、刻印を彫った様です。この北桔橋門は防御のため常時、桔ね上げられていました。非常口的な役割をになっていたと思われ、本丸御殿の火災の時は桔橋を下ろし、避難したと思われます。又、本丸の裏門として将軍の柩を運び出す際も北桔橋を下ろしたようです。御迎いに来た、寛永寺や増上寺の僧侶も、北桔橋門より出入りしました。将軍が本丸内で、薨去された場合のみ北桔橋門を使用したようです。将軍職を譲位し、大御所になると西ノ丸又は二ノ丸等の御殿に居住するので、北桔橋門は使用しなかったようです。将軍在職中に薨去された将軍は、三代家光、四代家綱、五代綱吉、六代家宣、七代家継、十代家治十二代家慶、十三代家定、十四代家茂ですが、家茂は大阪城で薨去され、亡骸は船で江戸へ運ばれ、増上寺で葬儀されたとの事なので、北桔橋門は使用していないと思われます。

※徳川家の菩提寺は、三河時代（松平家）は大樹寺で、浄土宗の寺院でした。初代家康が江戸へ入封した際に、江戸城より程近くに有った、浄土宗の増上寺に決めました。二代秀忠は増上寺にて、葬儀を行い、埋葬されました。徳川家のブレーンとして、家康、秀忠、家光の三代に仕えた、南光坊天海が、1625年（寛永二年）江戸城から見て鬼門の方角である上野の台地に徳川幕府の安泰を祈願して、寛永寺を創建されました。その後、三代家光、四代家綱、五代綱吉の葬儀を寛永寺が続けて行ったところ、増上寺より「菩提寺は当寺院ではないか？」とクレームがあり、六代家宣、七代家継の葬儀を増上寺が取り仕切り、その後両寺院が、おおむね交互に行うように決めたようです。菩提寺を二つの寺院にしたのは、一つの寺院だと勢力を持ち過ぎるので、二寺院したと言う説がありますが・・・・。歴代将軍の墓所も、分かれる様になりました。増上寺は二代秀忠、六代家宣、七代家継、九代家重、十二代家慶、十四代家茂の墓所。寛永寺は四代家綱、五代綱吉、八代吉宗、十代家治、十一代家斉、十三代家定の墓所があります。質素倹約で有名な八代将軍吉宗は、五代綱吉を尊敬していたとの事で、『自分の霊廟は作らなくて良い、綱吉様の霊廟に合祀する事』との遺言を残しています。吉宗は14歳の時、将軍綱吉に初めて謁見し、越前国丹生郡3万石を賜り大名に取り立てて貰い、1705年（宝永二年）22歳で紀州藩主へ、将軍綱吉より吉の字を貰い吉宗となりました。

※初代家康の墓所は日光東照宮、三代家光の墓所は日光山輪王寺、十五代慶喜の墓所は谷中霊園です。

※北桔橋門は、東御苑の公開日の公開時間中は自由に往来できます。西桔橋は、春と秋の乾通り通り抜けの際、東御苑の公開日は、乾通り⇒西桔橋⇒本丸への通行ができます。



北桔橋門古写真

乾通りからの西桔橋

⑳清水門

清水門は創建年代は明らかではないが、1607年（慶長十二年）に北の丸普請が行われていたことから、この時期に建てられたものと考えられています。清水門が建っている辺りは、中世の頃は清水寺があったといわれ、名前の由来と伝わります。東面する高麗門と南側に直行する渡櫓門からなる桝形門であります。1961年（昭和36年）に『旧江戸城清水門』として国の重要文化財に指定されています。江戸時代には江戸城の一画に取り込まれ、北の丸への出入口として利用されました。北の丸の江戸時代初期の頃は、武家地として利用され、中期以降は、御三卿のうち田安徳川家・清水徳川家の屋敷と蔵地として使用されました。

㉑田安門

田安門は1636年（寛永十三年）に建てられたものと考えられています。田安門が建っている辺りは、田安台といわれていた百姓用地で、田安大明神（現・築土神社）が有ったことが、門名の由来といわれてます。1961年（昭和36年）『旧江戸城田安門』として国の重要文化財に指定されています。北面する高麗門と西側に直交する渡櫓門からなる桝形門であります。「田安口」、「飯田口」と呼ばれ上州方面への起点となりました。
江戸城造営後は、「北の丸」と称して、代官屋敷や大奥に仕えた女性の隠遁所となりました。千姫や春日局、家康の側室英勝院の屋敷などがありました。
江戸時代中期以降は、西側一帯を田安徳川家、東側一帯を清水徳川家が、それぞれ所有し屋敷を構えてました。
※1861年（文久元年）11月15日、和宮親子内親王一行が、十四代将軍家茂との婚儀のため、当時、当主の不在だった、江戸城北の丸の清水屋敷に入りました。同年12月11日の大奥入りまでの一か月近くを、北の丸清水邸で過ごしたそうです。本丸大奥への登城は、大手門からの入場だったそうです。格の違いなんですか？ちなみに天璋院篤姫の登城は、平川門だったと伝わります。
※現在、田安門・清水門共に北の丸公園の出入口として常時通行が、可能となっています。

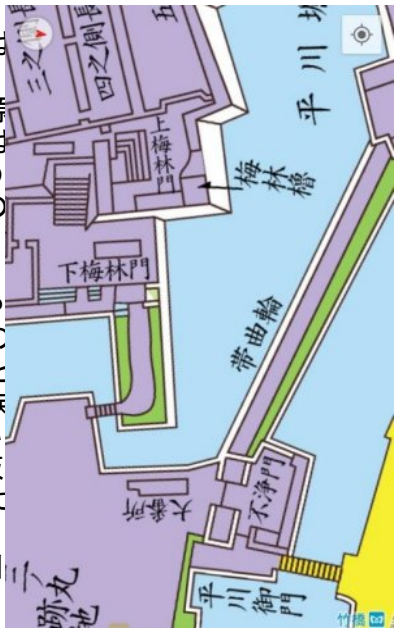
Ⓒ梅林坂（ばいりんざか）

本丸と二の丸をつなぐ坂で、梅林があったことから、その名がつけられました。
1478年（文明十年）、太田道灌が天神社をまつり、紅梅、白梅を数百本植えたことに由来するが、そのころの場所は定かでないそうです。昔、坂は右曲りの石段で、上り坂の前には仕切り門しかなく、坂上には渡櫓門があり、この門が上梅林門で、大奥に一番近い門でした。坂下は食い違い門で、平川門の近くには下梅林門がありました。
上梅林門跡の切石の石垣は実に見事なものであります。下梅林門の石垣は1928年（昭和三年）に修復されたとのこと。坂の石垣はL字型で、一方は典型的な野面積みで古く、他方は整然とした打ち込み接ぎです。
現在ある梅林は、1967年（昭和四十二年）に整備されたもので、坂の上から下まで70本程の梅の木があるそうです。
梅林坂には、山王権現社もあったそうです。二代将軍秀忠の時代、天神社は半蔵門外に移し、平河天満宮としました。また山王権現社は紅葉山に移され、江戸城の護りとなり、現在は赤坂にある山王日枝神社となっています。
二の丸と、本丸をつなぐ坂として、白鳥濠付近より、汐見坂という勾配の急な坂もあります。昔は日本橋辺りの海が見えたようで、汐見坂という名前の由来とのことです。

北の丸古地図

㉒平川〔河〕門（御局門・不浄門）

この門も外桝形の構えであるが、他の門とは異なって帯曲輪が、竹橋門（現、竹橋交差点）に向けて長く延びており、また平川濠と天神濠に挟まれた通路はコの字に折れ曲り、複雑な構造になっています。復元ですが、木橋・高麗門・渡櫓門が有るのは、この平川門だけであります。欄干には、擬宝珠（ぎぼし）という装飾が、設けられています。江戸時代に二重橋で、実際に使用されていたもので、慶長や寛永の銘があり、昔の面影を伝える橋であります。名前の由来ですが、平川は神田川下流部の古い名で、日比谷入江に合流していたそうです。平川門の周辺には上平川村、下平川村という集落が有ったことにちなんでいるそうです。江戸城普請に伴い、平川の流路が東回りに変更され日本橋川や外濠川となりました。平川門は三の丸の正門にあたり、御三卿の登城門と定められ、奥女中の通用門であったことからお局門と呼ばれました。また、江戸城の北東の方角になることから不浄門とされ、城内の糞尿、死体、罪人を城外に出す門とされました。生きて平川門を出た罪人は絵（江）島と浅野の二人しかいないと言われますが、他にも多数いたそうです。浅野内匠頭長矩は、この門を出て奥州一関田村家の上屋敷（現、港区新橋4丁目）へ、庭先にて即日切腹となりました。
絵島は、本名を「みよ」と言い、六代家宣の側室で七代家継の生母であるお喜世の方（月光院）に仕え、その右腕とも言われました。月光院の引きで、御年寄として大奥の公務を仕切ってました。
1714年（正徳四年）月光院の名代として前将軍・家宣の墓参りのため奥女中数名と共に増上寺へ代参しました。その帰途、木挽町（現、中央区東銀座）の芝居小屋・山村座に立ち寄って、歌舞伎見物をしました。当時は、自分付きの奥女中の労をねぎらうため、多々行われていたようです。この日は絵島は、気分が良かったのか羽目を外してしまい大奥の門限である、暮れ七つ（日没の2時間前、二月なので15時30分頃）より遅れて大奥七つ口に到着し、酔った勢いで番人ともめ、無理やり開けさせたとの事。この門限破りが老中まで伝えられ、問題となっていわゆる≪絵島生島事件≫に発展し、歌舞伎役者・生島新五郎との密会を疑われ、後に大奥最大のスキャンダルと言われました。このスキャンダルで、山村座は取り潰され、生島は三宅島へ遠投、連座者として実家の白井家当主旗本だった、義理兄の白井平右衛門勝昌は斬首され、絵島は死罪を減じて遠島と裁決が下りたが、月光院が減刑を嘆願したため、信州高遠（現、長野県伊那市高遠町）へ流され、内藤家お預かりのもと、幽閉されました。一説によると、六代将軍・家宣の正室・天英院派と七代将軍・家継の生母・月光院派の派閥争いで、≪絵島生島事件≫は、天英院派の捏造と言われてますが・・・。
絵島は高遠で27年の歳月を過ごし1741年（寛保元年）61歳の生涯を閉じました。生島新五郎は、その翌年に赦されて、江戸に帰ったと伝わります。
江戸城の各城門には、門限が定められていました。この平川門は、明け六つに開門、暮れ六つに閉門と決められていました。春日局は暮れ六つの閉門に間に合わず、一夜を門外で過ごしたとの事、その時の門番は、小栗又一郎という旗本でした。幕末の勘定奉行で新政府軍に処刑された、小栗上野介忠順（ただまさ）通称・又一の御先祖様です。又一郎は、春日局様だろうが「規則は規則」と、厳しい対応をしました。又一郎はお咎めを覚悟したようですが、将軍家光は規則を厳守した又一郎を絶賛し、五百石の加増をしたと伝わります。又、門限に遅れた春日局は自身を咎め、自ら門外で一夜を過ごし、後に門番にお菓子を授与し、労をねぎらったとも伝わります。
桝形の奥側、渡櫓門に隣接するように小さい門があります。帯曲輪に通じる門として帯曲輪門と伝わりますが、この門を不浄門とし、帯曲輪に船着場があり、死体や糞尿を運び出したという説がありますが、定かではないそうです。



※明六つとは、日の出の概ね（おおむね）三十分前。暮六つとは日没後概ね三十分後といわれてます。
※小栗家当主に代々伝わる、又一（またいち）という通称の語源は、三河時代にさかのぼります。家康に仕えていた、小栗忠正は徳川家譜代として二代目当主で、槍働で活躍しました。13歳の時に家康の小姓として出仕。1570年（元亀元年）姉川の戦いの際に家康の側で警護にあたり、急襲してきた敵兵を相手に奮戦。家康はこの働きを賞賛して名槍を褒美として与えた記録が残ります。その後も忠正は、合戦ごとに一番槍を成したため「又もや一番槍」の意を込めて「又一」の名を賜ったと伝わります。あまりの奮戦ぶりに、白地の背指物が血に染まって赤地のごとく見えたと寛政重修家譜に記されたと伝わります。「小栗党」と呼ばれた一族郎党を率いて、駿河侵攻や小牧・長久手の戦い、関ヶ原の戦いなどで多くの戦功をあげ、2550石を有する旗本となりました。大阪夏の陣にて鉄砲傷を受け、その傷が元で1616年（元和二年）に主君・家康公の後を追う様に死去しました。享年62歳。
小栗家のような忠誠心が強く、勇猛果敢な三河武士達が、徳川300年の繁栄を支えてきたんですね。

㉓和気清麻呂像（わけのきよまろ）

この和気清麻呂像は、皇居外苑にある楠公（楠木正成）銅像と共に文武の二忠臣を象徴し、建造されました。1940年（昭和十五年）皇紀2600年を記念して、大日本護王会と清麻呂公銅像建設期成会が銅像作成を計画し、建設しました。高さ4m20cmで、作者は佐藤清蔵氏とされてます。
和気清麻呂は、733年（天平五年）備前国藤野郡（現・岡山県和気郡和気町）に生まれ、奈良時代末期から平安時代初期にかけての貴族で、48代称徳天皇、49代光仁天皇、50代桓武天皇に仕えました。48代称徳天皇は、46代孝謙天皇で一度即位し、譲位により上皇になりました。女帝というのは皇室の未亡人、あるいは未婚（退位後も結婚できない）者に限られています。孝謙上皇の時、病に臥せましたが、弓削道鏡という僧侶が祈祷をして病を癒し、上皇の深い寵愛を受け道鏡は宮廷に深く入り込みました。これを諫めた47代淳仁天皇を排除し、自ら称徳天皇として重祚（ちょうそ）しました。これにより道鏡の権力はますます強まり法王の称号を賜って、儀式は天皇に準ずるようになりました。その背後には、女帝と道鏡のあいだに特殊な関係があったようで、ついには道鏡を天皇としようという動きさえでてきました。これは日本の皇位の正統にとって真の危機を意味する事となりました。更に「道鏡を皇位につければ天下泰平になるであろう」という宇佐八幡の神託（御告げ）があったと、道鏡自身から聞かされた称徳天皇はさすがに迷い、臣下の和気清麻呂に命じて、もう一度宇佐八幡の神託を受けに行かせました。清麻呂には、道鏡より賞罰をちらつかせての圧力がありましたが、屈することなく「天皇となる者は皇孫でなければならない。道鏡を絶対に皇位につけてはならぬ」が、神託であると発表しました。これにより道鏡は天皇になれなくなりました。怒った称徳天皇は和気清麻呂の名を別部穢麻呂（わけべのきたなまろ）と改名させて、大隅国へ配流してしまいましたが、程なくして称徳天皇が天然痘で急死し、後ろ盾を無くした道鏡が失脚すると、清麻呂は大隅国から呼び戻され、光仁天皇、桓武天皇に仕えました。桓武天皇には平安京への遷都を進言するとともに、建都事業に尽力したと伝わります。799年（延暦十八年）薨去。享年67歳。
※749年（天平勝宝元年）～孝謙天皇～758年（天平宝字二年）～淳仁天皇～764年（天平宝字八年）～称徳天皇～770年（宝亀元年）～光仁天皇～782年（延暦元年）～桓武天皇～806年（延暦二十四年）。孝謙と称徳は六人目の女帝で同一人物です。
※歴代女帝は（33代推古）（35代皇極、37代斉明）（41代持統）（43代元明）（44代元正）（46代孝謙、48代称徳）（109代明正）（117代後桜町）で8人、10代ありました。109代明正天皇は称徳以来実に859年ぶりの女帝でした。父は108代後水尾天皇で、母の徳川和子（まさこ）は、江戸幕府二代将軍・秀忠と正室お江の五女でした。明正天皇は幼名を女一宮（おんないちのみや）と言い突然譲位した後水尾のあとを受けて、1629年（寛永6年）わずか5才で即位しました。秀忠の孫・明正天皇の即位により、徳川家は初めて天皇家の外戚になりましたが、和子の産んだ二人の皇子は共に夭折してしまいます。従って、外戚も一代限りで終わってしまうのです。これは天皇家や公家の陰謀とする説もありますが・・・。明正天皇は14年の在位を経て、異母弟の後光明天皇に譲位し、太上天皇となりました。生涯独身を貫き、72歳で崩じています。
※重祚とは、一度天皇を退位し、再び天皇として即位すること。
※宇佐八幡とは、現・大分県宇佐市にあり、全国に約44，000社ある八幡宮の総本社であります。古くから皇室の崇敬を受けていました。
※皇紀とは、初代神武天皇の即位を紀元前660年と、明治政府が明治五年に定めましたが、殆ど普及しませんでした。キリストの生誕の西暦に対抗して制定した感が、ありますが・・・。ちなみに西暦2020年の今年は皇紀2680年になります。清麻呂像が計画された皇紀2600年は、旧日本海軍の主力戦闘機、零戦（れいせん）がデビューした年で、皇紀2600年なので零戦としました。

和気清麻呂十円札

㉔平将門の首塚（将門塚）（大手町）

将門の首級は京まで送られ都大路で晒され、三日後に夜空に舞い上がり故郷に向かい飛んでゆきましたが、力尽きて落下しました。落ちた場所と言うのが、千代田区大手町のこの地と伝承されています。

平将門は、桓武平氏の祖とされます、平高望（高望王）《50代桓武天皇の曾孫》の孫にあたります。高望は、上総介として898年（昌泰元年）に上総国府の国司として三人の息子を伴い任官しました。高望は任期が過ぎても帰京せず、在郷豪族と息子たちの婚姻を結び、在地勢力との関係を深め、常陸国、・上総国・下総国の未墾地を開発、勢力を拡大し、その権利を守るべく武士団を形成して、高望流桓武平氏（坂東平氏）の基盤を固めました。将門の父は高望の三男・良将で、所領は下総国の未墾地を開発したと、伝わります。母は、縣《県》（あがた）の犬養春枝（いぬかいはるえ）という下総の古代氏族の女（娘・むすめ）と伝わります。将門の生年は不詳でありますが、9世紀末～10世紀始めとされています。将門は、母の出身地である相馬郡（古代相馬郡）現千葉県北西部～茨城県南西部辺りで生まれ育ったと伝わります。十代半ば頃、官位を得るため平安京に赴き、藤原北家の氏長者後の関白・藤原忠平を主君とし仕官しました。12年程在京したところで、父・良将が他界すると、伯父の国香が、父の所領を奪い取ろうと攻めてきます。あわてた将門は無位無官のまま、東国へ戻り父の所領を守ります。天性のものでしょうか、馬の扱いに優れていて、戦上手だったと伝わります。しかしその戦い方は尋常ではなく、当時としては珍しく敵を殲滅（残らず滅ぼすこと）し、周囲の恨みも買ったようであります。将門が、東国で暴れ回っていると朝廷に告げ口されて、朝廷に呼び出され、京に上り釈明しています。しばらく平安京に留まり、許され、東国に帰ってきます。再び、国香や従兄の貞盛に襲われ戦になり、伯父の国香を殺してしまいます。罠に仕掛けられた様に、常陸国の国府を襲い中央より派遣された国司を追い出してしまいます。当時は、国司が不正を行い、多く税を集め私腹を肥やしてたようです。そのままの勢いで関東諸国の国司を追い出し、関東一円を支配するようになったと、伝わります。新皇を名乗り、独立国家を作ろうとしたと伝わりますが・・・。周辺より祭り上げられ、いつのまにか、新皇にされてしまったんじゃないかと思っとりますが・・・。これにより、将門は朝廷より反逆者（朝敵）とされ、追討令がでます。940年（天慶三年2月14日）に藤原秀郷（別名・俵藤太）と、従兄である平貞盛（国香の嫡男）に打ち取られてしまいます。これを承平・天慶の乱（じょうへい・てんぎょうのらん）と言います。将門の気質は「弱気を助け、強気をくじく」「頼まれたら断らない」「正義感が強い」義に厚い性格だったと言われてます。その性格が、千年の時を超えても江戸っ子に親しまれてる由縁ではないでしょうか。現在この地は東京都指定の旧跡となっていますが、関東大震災以前は、古墳の様な塚（小山）が、ありました。江戸時代は雅樂頭（うたのかみ）酒井家の上屋敷が有り、庭園の築山として利用され大切にされました。明治になると大蔵省の中庭となり保存されますが、関東大震災で大蔵省の建物は、崩壊炎上してしまいます。大蔵省はこの地を更地にし、新庁舎を建てる計画をたて古墳（塚）の調査をしながら、工事が開始されます。当時は文化財保護法もなく、致し方のないことだったんです。円墳とされてたましたが、前方後円墳で、石室は江戸時代初期に修復された、痕跡が、あったそうです。工事が進むにつれ、新聞に訃報が出ます。現役の大蔵大臣・早速整爾が入院三ヶ月後に死亡、それに続き二年のうちに大蔵省関係者が、十四人も死亡。怪我人の方では、足を怪我したものが続出しました。誰ともなく、将門塚を壊し、毎日々踏みつけているから、祟られたのではないかと、さすがの官僚たちも怖気づき、塚上のバラックを解体、生垣を設けて灯篭・礎石を復元した。神田明神の宮司を招いて、鎮魂祭を行っています。1940年（昭和十五年）6月20日、落雷により大蔵省を含む、九つの官庁を焼いてしまいます。これを機に大蔵省は霞ヶ関へ移りますが、この年は将門公没後千年にあたり、鎮魂祭を行っています。時の大蔵大臣・河田烈はここに将門塚があったことを後世に伝えて欲しいと関東大震災後に失われた古蹟（こせき）保存碑を復元しました。やがて太平洋戦争の戦局が悪化し、空襲で都心は焦土と化し敗戦。焼け野原の中に将門塚はポツンと残ります。戦後、GHQがこの地に駐車場を作ろうとしたところ、ブルトーザーが、転倒し作業員が死亡、GHQが祟りを恐れ、作業を中止したという説が有りますが、定かではない様です。将門塚の地が駐車場になってしまうと聞いた、当時の大手町々会長・遠藤政蔵氏は町会の人々と共にGHQに陳情に訪れます。「ここは古代の大酋長の墓だ」と言って、生垣を作り町会で管理する事をGHQに納得させました。寸でのところで将門塚は江戸っ子たちによって守られたのです。GHQが去った後、土地は東京都から民間に払い下げられますが、将門塚の地は地元の管理とされました。1971年（昭和四十六年）東京都の文化財（都旧跡）に指定されました。

関東大震災直後の将門塚

※将門を討った、平貞盛の四男維衡（これひら）の家系は平清盛へ繋がります。藤原秀郷の家系は武家として繁栄し、藤原清衡（奥州藤原氏）等へ繋がります。

※雅樂頭（うたのかみ）とは律令時代に治部省に属し、雅樂等を司り、歌舞を教習した雅楽寮の長官（頭）

Ⓐ大楠公像（楠木正成）

くすのきまさしげ　（皇居前広場）

この像は皇居外苑、皇居前広場の南東側にあります。武家政権を倒して天皇専制を確立するという夢の実現に生涯をかけた第96代後醍醐天皇に従い、私利私欲のためでなく、己の信じた大義に目を向け理想のために戦い、湊川の戦いで足利尊氏に敗れて玉砕をとげ、自害した悲劇の武将楠木正成（大楠公）の銅像であります。正成と共に自害した弟の正季（まさすえ）は「七たび生まれ変わって朝敵を倒したい」と、言い残したと言われます。この『七生報告』の精神は、尊皇思想として幕末期、維新の志士達は正成を偶像化し、影響をあたえたと言われてます。又、この精神は戦前の教育でも培われ、彼こそ軍人のあり方の先駆であり、それが神風特別攻撃隊菊水隊（きくすいたい）まで続いたとされてます。※菊水は、正成の旗印＆楠木家の家紋とされてます。
楠木正成の出自は、橘氏の後裔を称しますが、不明であります。1294年河内の国で生まれ1336年7月5日湊川（現、兵庫県神戸市中央区）で没しています。彼の生い立ちは、河内の土豪説や御家人説など諸説有りますが、確かな説はありません。明治以降は「大楠公」（だいなんこう）と称され、明治13年には正一位を追贈されています。
本体の高さは4m、花崗岩の台座を含めると8mに及ぶ堂々たる姿で、上野公園の西郷隆盛像、靖国神社の大村益次郎像と並び「東京の三大銅像」の一つに数えられています。具足を備えた武者像として、外国人用の旅行ガイドブックに掲載されることも多く、足を留めて見上げる外国人観光客の姿が引きも切らない、人気のスポットになっています。
この楠木正成像は、別子銅山開坑200周年事業として住友から宮内庁へ献納されたものです。1889年（明治22年）に計画され、竣工したのが1900年（明治33年）、実に11年の歳月を費やしました。正成の頭部は高村光雲がデザインしたと、伝わります。
※橘氏とは、貴種名族『源平藤橘』（げんべいとうきつ）、四つのうち飛鳥時代末期に県犬養三千代（橘三千代）・葛城王（橘諸兄）を祖として興った皇別（臣籍降下）氏族です。
ちなみに源は源氏、平は平氏、藤は藤原氏。
※別子銅山とは、愛媛県新居浜市にあった銅山です。1690年（元禄3年）に発見され、翌年より1973年（昭和48年）までの282年間に約70万トンの同を産出し、日本の貿易や近代化に寄与しました。一貫して住友家が経営し、関連事業を興す事で発展を続け、住友が日本を代表する巨大財閥となる礎となりました。

三の丸尚蔵館（さんのまるしょうぞうかん） 東御苑

平成元年6月、上皇陛下と香淳皇后が、昭和天皇まで代々皇室に受け継がれて工芸品などの美術品類6，000点余を国にご寄贈されたのを機に、これらの美術品を大切に保管するとともに、調査、研究を行い、展示により一般公開することなどを目的として1992年（平成4年）に建設されました。なお、1996年（平成8年）に故秩父宮妃のご遺品、2001年（平成13年）に香淳皇后のご遺品、さらに2005年（平成17年）故高松宮妃のご遺品が加わり、現在約9，500点の美術品類が収蔵されています。現在、美術品類の収蔵が増え、手狭になったとの事で、尚蔵館の新築を予定しています。

⇩金明水（きんめいすい） 東御苑

敵に攻められ籠城に追い込まれたとき、兵糧と水が持つか否かが城の運命を握るほど、水は大切だった。金明水は江戸城天守台前の小天守にあり、今も満々と水をたたえています。深さ約10メートル。北側、すぐ近くの乾濠の水面までは、約20メートルなので、かなりの高みまで水が上がっています。

緑の泉 ⇨

東御苑

午砲台跡（ドン） 東御苑

1871年（明治4年）正しい時刻を知らせるために設置されました。天文台からの信号合図で近衛兵が正午の正しい時報を撃ち（空砲）ました。1929年（昭和4年）に廃止される58年間、「ドン」の愛称で東京府民に親しまれました。本丸芝生広場の中央に午砲台跡の石標が据えられています。実際に使用されていた大砲が、東京都小金井市の江戸東京たてもの園に保存展示されてます。

桃華楽堂（とうかがくどう）　東御苑

　1996年（昭和41年）、香淳皇后の還歴を祝して建設された音楽堂です。
桃は香淳皇后のお誕生月が3月なので桃の節句と、お印の「桃」にちなみ、また華は「十」が6個と「一」で構成されていることから、還暦（数えで61歳）の意味を込めて「桃華楽堂」と命名されました。
設計は、長崎二十六聖人記念館や穂高碌山（ろくざん）美術館を手がけた、故今井兼次氏が担当しました。全体として、日本女性の優雅でおおらかな理想像を表していると言われています。

宮内庁楽部　東御苑

　楽師は、千数百年の伝統ある「雅楽」を正しい形で保存、演奏するよう日々研鑽（けんさん）しています。楽器は、日本古来の神楽笛・和琴などの他に外来の笙（しょう）・篳篥（ひちりき）・笛などの管楽器と箏（こと）・琵琶（びわ）などの弦楽器と鞨鼓（かっこ）・太鼓・鉦鼓（しょうこ）・三の鼓（つづみ）などの打楽器があります。雅楽は、宮中の儀式、饗宴（きょうえん）、春秋の園遊会などの行事の際に演奏されます。また国内及び外国公演を行い、日本文化の紹介に努めています。宮内庁楽部の楽師が演奏する雅楽は、国の重要無形文化財に指定されています。

宮内庁書陵部　東御苑

大日本帝国憲法

明治22年(1889)2月に明治天皇へ上奏された2通の大日本帝国憲法のうち，宮中で保管されたもの。(識別番号26328-1)

　ここは皇室伝来の古文書などの図書や記録の保管・補修や、宮内庁関係の公文書の保管、陵墓の管理を行っている、宮内庁の部局の1つであります。また皇室の方々の戸籍にあたる「皇統譜」（こうとうふ）の調製・登録・保管も行っています。建物の両側は書庫になっており、古文書は自然な状態で保管するのが一番良いため、自然喚起を取り入れており、まさに現代の正倉院と言うべき建物であります。

半蔵門（搦手門）

この門は大手門の反対に位置し甲州街道（国道20号線）へ繋がります。この門は天皇皇后両陛下、愛子内親王の天皇家と秋篠宮家（五人）及び上皇上皇后両陛下の専用の通用門となり上記以外の皇室や一般人は、通行する事が出来ません。
江戸時代は桝形の城門でありましたが、明治になり櫓門が撤去され、太平洋戦争で旧来の門は焼失しました。現在の門は、和田倉門で使用していた高麗門が、移築された物と、伝わります。
名前の由来は、江戸時代初期の頃、この門の警固を担当した徳川家の家臣、服部正成・正就父子の通称「半蔵」に由来しています。服部家の部下（与力30騎、伊賀同心200名）がこの門外に組屋敷を構えていたそうです。又、有事の際に将軍を甲州街道から幕府の天領である甲府へと安全に避難させる、任務もあったと伝わります。
※13代将軍家定の頃の古地図には、この半蔵門（新宿側）と竹橋門（神田側）へ諸人が通行可能な近道（バイパス）がありました。

江戸城総構え/江戸の人口

総構え（そうがまえ）とは城のほか城下町一帯も含めて外周を堀や石垣、土塁で囲い込んだ、日本の城郭構造の事で、防御の要となります。江戸城の場合東に隅田川～江戸湾、南に浜御殿（現、浜離宮庭園）～虎ノ門～赤坂門、西に四谷見附～JR中央・総武線～水道橋、北に神田川が、総構えのラインとなります。総構えの長さは、実に1万5700mで、日本で一番の規模を誇りました。ちなみに第二位は後北条時代の小田原城で、約9000m、第三位は豊臣時代の大阪城で、約8100mとなっており、江戸城が如何に巨大な城郭だったかが、分かると思います。

家康が入府した1590年（天正18年）頃の江戸は小さな町にすぎず、人口もそれほど多くは無かったと、思われます。家康の譜代の家臣団が約10000人程と、その家族。その後、職人や商人などが居住するようになりました。江戸初期の正確な人口は不明ですが、数万人程と考えられます。1614年（慶長19年）日本に漂着したドン・ロドリゴの『日本見聞録』によると、「江戸の人口は15万人」と記録されています。1672年（寛文12年）頃には40万人、1695年（元禄8年）には80万人と推定されてます。日本で初めて人口調査が行われたのが1721年（享保6年）のことで、江戸の人口は町人約50万人、武家約50万人、寺社その他約10万人で、計110万人で、100万人を超える巨大都市になっていました。当時、欧州第一のロンドンが約70万人、パリが約50万人、、ウィーンが約25万人とのことで江戸は世界最大？の都市でした。1700年（元禄13年）の世界人口は推定6億人、日本の人口は推定3000万人とされ、日本人口の世界シェアは5%、なんと世界の20人に1人が日本人でありました。ちなみに3世紀（弥生時代後期）頃は世界人口2億人、日本人口60万人で日本人口の世界シェアは、0．3%で実に世界の330人に1人しか日本人がいない中から、良く増えたものだと思います。江戸元禄年間の日本人口の世界シェア5%をピークに下降線をたどり、2000年（平成12年）世界人口60億人、日本人口1億2000万人で日本人口の世界シェアは、2%で世界の50人に1人が日本人となっています。

Ⓑ和田倉門（皇居外苑・皇居前広場）

家康が入府した頃、現在の皇居前広場は日比谷入江と言う、海だったといわれてます。和田倉門は皇居前広場の一番北側に位置し、太田道灌時代から江戸時代初期には付近に船溜まりがありました。和田倉門の名前のいわれは、船から荷揚げされた穀物などを保管する倉が有ったことと、わだ（わた）＝海の意味がありました。江戸城の普請、神田川・日本橋川の工事、日比谷入江の埋立等が、進むにつれて和田倉門付近の船溜まりや倉などは日本橋へ移り、埋め立て地は武家地（大名屋敷）になりました。江戸時代の和田倉門は、木橋～高麗門～左側に渡櫓門を備える桝形門でした。明治天皇が、明治元年にはじめて御東幸の際、この門を通って御入城されたそうです。
関東大震災で損壊し、渡櫓門は翌年の地震で倒壊してしまいました。木橋は腐食し傷みが目立つので、1940年（昭和15年）の『紀元2600記念事業』で復旧工事を始めましたが、太平洋戦争の戦禍により中断、戦後に復興し現在の形となりました。高麗門は、戦火で焼失した半蔵門へ移築され、現在に残ります。現在の和田倉門は門跡として石垣が残され、復旧した木橋（和田倉橋）は、平川門に架かる平川橋とともに江戸城木橋の形を復元した、貴重な木橋です。隣接する形で和田倉噴水公園があります。1961年（昭和36年）上皇陛下の御結婚を記念して創建された大噴水を、1993年平成5年6月の今上天皇の御結婚を機に『継続と新たな発展』をテーマに再整備し、1995年平成7年6月に完成しました。噴水は固より、滝やせせらぎも加わり、無料休憩所が有り、憩いの場となっています。夜になるとライトアップされる噴水は、幻想的な空間を醸し出し、密かな都心のデートスポットです。

⇩現在の和田倉橋

⇩和田倉門の古写真

皇居ランのルーツ

皇居ランのルーツは意外に古く、半世紀以上の歴史があります。1964年（昭和39年）東京オリンピックの閉会式から一週間後の11月1日未明に皇居の外周で「皇居一周マラソン」が開催されました。主催したのは銀座のクラブやバーで、選手はホステスで異例ずくめの大会でした。オリンピックのマラソンで、銅メダルを取った円谷幸吉選手にあやかっての大会で、当時の新聞や雑誌等で話題になりました。40人程の参加者で、一位になった娘は約5kmのコースを23分台の好タイムで走り切ったそうです。それに刺激されるように国立国会図書館で働く男性職員の有志が、昼休みに走り始めました。やがて「国会図書館マラソンクラブ」が設立、女性職員を含む50人ほどに膨れ上がり、その活動を見て、皇居周辺で働く官庁の職員や会社員も走り出しました。やがて’70年代には皇居ランが定着しました。多くのランナーがスタート地点にする桜田門前広場には、日本陸上競技連盟が’75年に皇居ランナーのために寄付した時計台があります。現在のような大ブームになったのは2007年（平成19年）第一回東京マラソンが要因となってるそうです。

参考文献等（●書籍等〇インターネット・ウエブ・ブログ等）

●皇居東御苑セルフガイドブック　財団法人　菊栞文化協会／●日本100名城公式ガイドブック　財団法人　日本城郭協会／●大人が知らない！最新日本史の教科書　小和田哲夫／●徳川十五代　株式会社英和出版社／●歴代天皇大全　学研プラス／●城の攻め方・つくり方　宝島社　●天皇家の秘密がわかる本　歴史雑学探究倶楽部　学研／●読む年表日本の歴史　渡部昇一　●日本の名城99の謎　歴史ミステリー研究会／●城の戦国史　鷹橋忍／●日本史の内幕　磯田道史／●TOKUGAWA15 堀口茉純／●日本史の都市伝説　山口敏太郎／●将門と忠常　千野原靖方／●図説江戸城その歴史としくみ　学研／●パノラマ式皇居一周おさんぽガイド　植月真弓／●パノラマ写真で皇居一周　伊藤かんじゅん／●江戸城を歩く　祥伝社/●その「年齢（とし）」歴史が動いた！　偉人の伝説研究会
〇江戸東京博物館ホームページ／〇宮内庁ホームページ／〇環境省ホームページ／〇城人　日本城郭協会公認　https://shirobito.jp/ 〇日本の名所・旧跡 http://konno.ashigaru.jp/index.html 〇気ままに江戸♪散歩・味・読書の記録　https://wheatbaku.exblog.jp/ 〇平将門はなぜ日本史の中で「特異な存在」に見えるのか　https://gendai.ismedia.jp/articles/-/64456 〇江戸城（皇居東御苑）の「城壁、反りの美」や「石垣の積み方」を探求しました　http://yorimichi.club/2018/09/19/jyouhekinobi/ 〇江戸城三十六見附　リタイヤ男の暇つぶし　https://x-polarstar.com/category/edojyo/ 〇江戸三百藩　サライ　https://serai.jp/hobby/348908 〇江戸の歳時記　八月江戸の花火 東都のれん会　https://www.norenkai.net/ 〇千代田区観光協会　和気清麻呂像　https://visit-chiyoda.tokyo/app/spot/detail/110 〇歴史上の人物．Com　平将門とはどんな人物？　https://colorfl.net/tairanomasakado-matome/ 〇皇居周辺の「銅像」をめぐる　https://note.com/takamushi1966/n/n5bac8ec9690b 〇東京坂道ゆるラン　将門の霊よ、鎮まり給え「将門公首塚の祟り」　https://sakamichi.tokyo/ 〇平将門はなぜ日本史の中で「特異な存在」に見えるのか　https://gendai.ismedia.jp/articles/-/64456 〇スマホアプリ　大江戸今昔めぐり　https://edomap.jp 〇中山道を歩こう　過酷な彦根藩側の処分～桜田門外の変　https://ameblo.jp/yachtman/entry-10167908214.html 〇インターネット百科事典　ウィキペディア　https://g.co/kgs/Vvbp7
〇THE歴史列伝～そして傑作が生まれた～　日本一の玉の輿　桂昌院　https://www.bs-tbs.co.jp/retsuden/bknm/72.html
〇　T．M．OFFICE　それでも玉の輿に乗る？家光に見初められた〝八百屋の娘〟の生涯　https://www.tm-office.co.jp/column/20160530.html 〇【1089ブログ】日々奮闘中！写真アルバムの保存　https://images.app.goo.gl/BwXqemDubPS6vwqi6　〇ファンダフル　「皇居ラン」ブームのきっかけはホステスだった！？深夜の大会で出た″驚きの好タイム″　https://ure.pia.co.jp/articles/-62222?page=3 〇一般財団法人国民公園協会【皇居外苑】https://fng.or.jp/koukyo/

編集後記

「元号が、平成から令和へ変わったのを機会に皇居（江戸城）見学をやりましょう、案内役をお願いします。」と、このツアーの発起人である小野さんより話を頂き、自分のスキルUPを兼ねて二つ返事で承諾しました。皇居の案内は何度かした事は有りますが、大人数での案内は初めてのことなので、見学ツアー参加の方々がより深く理解をして頂くことと復習のために、ガイドブックを制作しました。言葉で伝えるより文章で伝えることの難しさを痛感し、又登載しました逸話ですが、うろ覚えの歴史雑学なので様々な文献等を参考にしましたが、諸説ある逸話に悩みながらもなんとか完成させることができました。歴史に興味のある方は、色々と調べてみると、楽しいかと思います。又、宮内庁が実施している、皇居一般参観（普段入ることの出来ない、西の丸地区の案内）や財団法人　菊栞文化協会のボランティア・ガイドさんが行う、皇居東御苑の案内などがありますので興味のある方は、参加してみてはいかがでしょうか？（by中村）

お勧めスマホアプリ
大江戸今昔めぐり

13代家定の頃の江戸の古地図が現在の地図と重ね合わせる事が出来るので、散策が楽しくなります。

記念のお土産にお勧めします。
皇居東御苑セルフガイドブック

三の丸、本丸売店にて発売してます。植物の事も詳しく載ってます。

皇居外苑案内図
縮尺1：10,000
0 100 200 300M
N
九段下駅
田安門
牛ヶ淵
日本武道館
清水門
清水濠
北の丸公園
科学技術館
北の丸公園管理事務所
千鳥ヶ淵戦没者墓苑
千鳥ヶ淵
千鳥門
竹橋駅
国立公文書館
乾門
北桔橋門
平川門
大手濠
大手町駅
吹上御所
皇居東御苑
日本庭園
三の丸尚蔵館
大手門
半蔵濠
半蔵門駅
皇居
宮内庁
桔梗門
桔梗濠
和田倉濠
和田倉噴水公園
半蔵門
新宮殿
坂下門
松濠
行幸通り
至る東京駅
国立劇場
二重橋濠
二重橋
皇居外苑
馬場先濠
桜田濠
正門
内堀通り
二重橋前駅
桜田門
馬場先口
楠木正成像
国会議事堂
桜田門駅
鍛冶濠
日比谷駅
桜田口
皇居外苑管理事務所
有楽町駅
日比谷濠
日比谷公園
苑(園)内路
芝生
建造物
植込
宮内庁管理用地

皇居航空写真